

男と女の不完全マニユアル

海王星の男と女

薄井ゆいじ



千ヨット
見
文庫

株式会社ウイアックス

海王星の男と女

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
神 殿	宝 箱	走 者	奇 跡	花 粉	増 殖	釣 魚	惑 星	鸚 鵡	潮 騒

潮騒

潮騒が聞こえる。

海上遠く、台風が接近しているのか、波は高く、白く砕けながら打ち寄せている。

誰もいない砂浜は風もなくおだやかだった。私はたわむれに砂をかき集めはじめた。砂山をつくろうと思うのだ。潮騒を聞きながら砂を触っていると童心に返ったようで、心楽しかった。

どのくらいそうしていたら、大きな砂の山が完成した。たいした造形物ではないけれど私は何かを成し遂げたような、満ち足りた気持で砂の山を眺めていた。

そのとき、ひととき大きな波が来て、つくった砂山をひと呑みにすると、あっさりとさらっていつてしまった。私は呆然として、平らになった砂浜を見ていた。

「つまらないものを、つくるからよ」

声がして、見ると女が立っていた。いつの間に近づいたのだろうか。このだっ広い砂浜に、さっきまでは一人しかいなかったはずだ。女はまるで海からたったいまあがってきたとでもいうように、波打ち際に立っている。心なしか、長い髪の毛の先端が濡れているようにも見える。

「いま、何て言いました？」私は女に言った。

「つまらないものをつくるから、さらったのよ」

「つまらないもの？」

「そう。だからさらったの」

波がさらった、という意味だろうが、この女が砂山をさらった、というふうにも聞こえて、私は空恐ろしくなった。

「あなたは、砂を馬鹿にしてるんじゃないの」女が言った。

「そんなことはない」

答えながら心のなかでは、馬鹿にするものにも、砂のことなんて、どうでもいいじゃないかと思う。

「どうでもいいというのね」

「そんなことは、言っていない」

「馬鹿にするものにも、砂のことなんて、どうでもいいじゃないか。そう思ったでしょう。そしていまは、この女は心のなかで読めるのかな。いったい俺に、どうしろっていうんだ。そう思ったでしょう」

「……………」

「もっと美しいものをつくって欲しいのよ。砂の、美しい彫刻をね」

「俺には、そんな造形力なんてない」

「大丈夫、私が手伝ってあげるから。ほら」

女がそう言った瞬間、私の手が勝手に動いて砂をかき集めはじめた。そして見る見る私の手は、何かのかたちを勝手につくりあげていく。女が、手伝ってあげる、と言ったのはこういう意味なのか。私は妙な女を無視して立ち去ろうとした。しかし足が自由に動かない。この女がコントロールしているのか。

「ほほほほ」と女が笑った。「そうそう。お上手ね。もっともっと美しくつくるのよ。もっともっと……………」

女は踊るように砂浜を移動している。私は操られながら黙々と砂を積み、海水で濡らして固め、造形をつづける。やめようと思う心を無視して手足は動きつづける。

「ねえ」と私は踊り舞っている女に声をかけた。「教えてくれないかな」

「何がお知りになりたいの。おほほほほ」

「私はいま、砂で何をつくっているのかな」

「ご自分がおつくりになっっているものが、おわかりにならないとおっしゃるの。おほほほ。殿方って、そういうことばかりおっしゃるから可愛い」

「可愛くなくてもいいから教えてくれないか。いま私がつくっているのは、砂の城か。それとも砂の塔か。砂の家か」

「いやあね。夢がない。どうして建物しか思いつかないの」

「砂の林檎。砂の葡萄。砂の檸檬」

「こんどは果物ばかり」

「砂のスパゲティ。砂のラーメン。砂のカレー」

「馬鹿ね。完全に、お馬鹿ね。いまあなたがつくっているのは、動物よ」

「砂の象。砂のライオン。砂の亀」

「ううん。ぜんぜん違う。人間よ」

「砂の女。砂の男」

「ずいぶん近くなった。教えてあげましょうか。あなたがいまつくっているのは、砂のあなたよ」

「自分を砂でつくってる？」

「悲しい？」

悲しくなどなかった。勝手に手が動いているのだから何の感情もなかった。だがいま女に、砂で自分をつくっているのは悲しいかと言われて、私は不意に、どこかから降ってきた大きな悲しみにとらわれていた。

「わかったようね」

「何が？ 俺は何もわかっていない」

「もうわかってもいいはずなのに」

女は踊り舞うのをやめて私のそばに來ると、私をじっと見た。私は相変わらず手を動かして砂をかき集め、砂を海水で固めている。そういえば、横たわっている人間のようなかたちになってきた。

「砂のあなたが完成した瞬間、あなたは波にさらわれて、消えてなくなってしまふのよ。いまはその予感で悲しみにとらわれているの。そのことなら、もうわかってはいるはずなのに」

「わるいけど、わからない。ただ、悲しみだけが独立して、不意にやって来ただけだ。なぜこんなことをする？」

「してるのは、あなた」

「この手を動してるのは、きみだ。そうだろう？」

「そういう言いかた、やめたほうがいいわ。誰かが自分を動かしている。だから自分には責任なんかない。殿方のそういう卑怯な論理は、もう聞き飽きたのよ」

なぜ私は、こんな目に遭っているのだろう。世の中の男たちは全員、一度はこんな目に遭うように仕組まれているのだろうか。

「まあ」と女が言った。「完成したようね。おめでとう。砂のあなた、素敵よ。いまなら、何でもして差し上